

悠久の京を訪ねて Part II Vol.9



京は古より人々が集い、その気候・風土の中、生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土物により縄文、弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

うるしとその容器

■縄文時代から使われた「うるし」

うるしを利用した装身具や木製容器、土器の表面に塗布する技術は、9,000年前の縄文時代にはじまります。うるしは5月から11月頃、樹の表面に細い筋を彫り、にじみ出た樹液を精製して作ります。採集した生漆は乳白色ですが、空気に触れると褐色に変色し、適度な温度によって硬化します。縄文人は生漆に炭素や鉄分を加えて黒漆、朱やベンガラを加えて赤漆とし、土器や木器の彩色のために利用しました。わたしたちが毎日使う漆器は、日本に古くから伝わるものなのです。

■さまざまな用途と研究

うるしは、古墳時代には麻布などをうるしで幾重にも固めた盾や矢筒といった武器などの皮革製品の表面に塗布して飾るとともに、焼き漆により防腐剤としても活用されました。また、奈良時代の木津川市馬場南遺跡からは一辺12.0cmの正方形で高さ2.3cmの黒色漆箱の蓋もみつかっています。この木箱は黒く発色する粉をまぜた粉漆材を下地に、2回うるしを塗り重ねていることもわかりました。加えて、縄文時代から近世に至るまで割れた食器を接合する接着剤として

京都府木津川市



も多用されたこともわかっています。近年、漆器の断面を電子顕微鏡で観察し、塗布された回数を調べたり、国内産か否かを主成分分析で解明する研究も盛んです。

■上狛北遺跡とうるし

上狛北遺跡では、恭仁宮跡と同時代の全長100mの直線的な溝や木簡などが確認されています。写真は、この遺跡から出土した赤焼けの土師器と呼ばれる器です。奈良時代の器の内側には、こげ茶色のうるしが薄く付着していることから、うるしを入れて保管した容器だと思われます。

なお、上狛北遺跡の出土品を2月18日に木津川市中央交流会館いずみホールで開催する第120回埋蔵文化財セミナーで展示されます。



上狛北遺跡から出土した土師器 壺